

# 伝文

日本口承文芸学会 会報  
第48号 2011年2月 発行

日本口承文芸学会  
〒150-8440 東京都渋谷区東4-10-28  
國學院大學文学部 花部英雄研究室  
TEL 03-5466-0224 (直通) / FAX 03-5466-0368 (資料室)  
E-mail koshobungei@mail.goo.ne.jp

## 井上ひさしと口承文芸 根岸 英之

劇作家・作家として幅広い活躍をした井上ひさし氏が、2010年4月、75歳で亡くなった。現在刊行中の『野村純一著作集』に、推薦文を寄せてもらえたらなどと、編集会議で話題にしてからほどない頃の出来事であった。

井上氏は1934年、山形県川西町に生まれ、仙台や釜石などでの生活を経て、1967年から1987年までの20年間を私の住む千葉県市川市で過ごし、その後は鎌倉市に住まい作家活動を続けた。その関心や活動は森羅万象に及ぶが、「土着」への眼差し、「ことば」への眼差しなど、口承文芸研究の視角とも通底するものが多い。

もっとも端的な作品としては、柳田國男『遠野物語』を換骨奪胎した『新釈遠野物語』(1976年)が挙げられよう。また、艶笑譚を含む『花石物語』(1980年)、狡猾者譚として読める『馬喰八十八伝』(1986年)、野村純一氏が井上氏との対談(「昔話の批評性」『國文學』1989年9月)で、「僕は『腹鼓記』をテキストのひとつにしているんです。(中略)一年生、二年生に『腹鼓記』を読め。そしてこの中の話は『日本昔話大成』でいうとどういうタイプの話か見分けがいたらそれで一人前だ、というふうにしているんだけど。(笑)」と指摘するほどの『腹鼓記』(1985年)などもある。

『月刊いちかわ』2007年9月号に掲載された「父・井上ひさし、娘・あや往復書簡 第二十二便 人生のおそろしさ」には、(幼いころに金作あんにやという作男のおじいさんがいました。(中略)たいへんお話が上手でした。毎日のように土地に伝わる話をしてくれたものです。ですからわたしたちは金作さんが大好きで、世の中でいちばん偉いのはこの人だと思っていました。)と回想される。

また、『民話の手帖39号』(1989年)に掲載された講演記録「わたしと遠野」を読むと、釜石時代に遠野へ行商をして実際に話を聞いた体験が、『新釈遠野物語』に結実したことが語られる。広島原爆をテーマにした戯曲「父と暮せば」(1998年)は、図書館で働きながら昔話の語り聞かせをしている娘が主人公。その父親が原爆資料を使って語る「ヒロシマの一寸法師」を含め、この作品は、口承文芸研究の視角から見ても、非常に深いテーマをはらんでいる。

「土地ことば」の問題を浮き彫りにした戯曲「國語元年」(1986年)、戦前戦後の紙芝居屋を主人公にした戯曲「夢の裂け目」(2001年)、終戦前後の落語家を描いた「円生と志ん生」(2005年)なども、口承文芸研究の観点から解析し得る魅力にあふれている。

去る2010年11月、私の所属する市川民話の会による「市川の民話のつどい」では、井上氏の民話にかかわる作品を、市川の民話とともに聴いてもらうプログラムを組んだ。また年の暮れ、『野村純一著作集』編集のため、野村敬子氏からお借りした『山形の民話10号』(1974年)には、野村純一「語り手以前」のすぐ後に、松沢俊夫「吉利吉利人」のことなど一井上ひさし氏に聞く」が掲載されていた。「井上ひさしと口承文芸」というテーマは、新たな観点となるに違いない。(千葉県)

第60回研究例会シンポジウム  
「声・音・身体文化をめぐる  
地域性と国際性」報告  
佐藤 優

2010年10月30日に第60回日本口承文芸学会研究例会が、第76回歴博フォーラムと共催という形で早稲田大学小野記念講堂にて行われた。当日は、風雨激しくあいにくの天候にも関わらず、多くの参加者が会場を訪れていた。

さてフォーラム全体テーマは、「声・音・身体文化をめぐる地域性と国際性」であった。フォーラムの概略は、開会の挨拶の後、午前中は「黒島の民俗誌―島譜のなかの神々―」の映像が篠原徹氏の解説を交え上映された。その後、フォーラム全体の主旨説明を松尾恒一氏が行った。午後は、一部・二部に分けられ、前半は「東アジア世界の中での沖縄の民俗」、後半は「声・音・ことばを“見せる”こと―歌謡・口承文芸の保存と展示―」という二つの視点から、映像上映及び基調講演として研究発表が行われた。

ところで、本報告ではフォーラム全体の内容について詳述する紙幅も無いことから、口承文芸研究と直接的に関わりのある第二部の研究発表を中心に報告してみたい。

まず高塚さより氏は、「口承の展示、身体展示」と題し報告を行った。高塚報告では、博物館・資料館において口承文芸は、「文芸」と関連づけられて展示されることが多いことを指摘し、研究の最前線である〈口承〉という視点を導入した展示はあまりなされておらず、この〈口承〉という視点を展示解説等に活かすことで新しい課題が見えてくることを指摘された。そして、事例として東京都江東区深川江戸資料館と神奈川県横浜市の小島民俗資料館の二事例を挙げ、双方の資料館における展示解説の実践例について資料を提示し報告された。

具体的には、前者では対話型の資料解説を行っていることを報告された。従来博物館・資料館では展示資料を「さわらず」「静かに」見ることがいわゆるマナーであるとされてきた。しかし、深川江戸資料館における来館者と館員が対話しながら館内をめぐる実践例は、従来型の博物館にはないものとして注目されるものであったといえよう。また後者においては、資料館運営者の実際使用した農具などが展示されているということで、解説には身ぶりを伴うなど身体的に展示資料を理解できる解説が行われていることが報告された。

次に内田順子氏は、「映像記録の可能性―研究・展示・交流」と題し報告を行った。内田報告では、フランス人の人類学者フェリックス＝ルイ・レニョーが1895年にパリで開催された「西アフリカ民族誌博覧

会」で西アフリカの人々の身体行動を連続撮影したことが映像記録を体系的に収集・管理する試みの端緒であったことを指摘された。レニョーは、撮影・収集した写真を人類学における「しぐさ」の比較研究に寄与する資料及び博物館展示資料に活用できると考えたことを挙げ、映像記録は当初から研究と展示資料の二面性を合わせ持つものであったことを指摘した。

こうした歴史的経緯をふまえ内田氏は、日本民俗学の黎明期に行われた渋沢敬三のアチックフィルムや宮本馨太郎撮影フィルム等を紹介し、あわせて現在内田氏も関わる歴博の民俗映像の制作とその展示方法を報告し、資料撮影・編集過程において資料の5W1Hの明示が映像の保存・継承と合わせて特に留意しなければならない点であることを主張されていた。

以上、二氏の報告をまとめてみた。ここから浮かび上がってくる問題意識を少し考えてみたい。高塚・内田両氏の議論は、まさにモノとして存在する資料を来館者及び研究者にどのようにして提示・提供するかという共通した問題意識が看取できる。

まず、資料がモノとして存在するためには、資料収集が前提として存在することは論を待たない。また、資料収集は博物館・資料館の大きな仕事の一つでもあった。集められた資料を前に博物館・資料館では従来、展示資料の説明としてパネル掲示と映像等で解説を行ってきたといえよう。しかしながら、両氏の議論から浮かび上がってくるのは、個々の資料を享受する側の視点に立つことを常に念頭において日々の展示解説また映像作成に携わっておられることである。

こうした姿勢がどこから生まれてくるのかを考えてみたとき、両氏の豊富なフィールドワーク経験がその背景として看取できるのではないだろうか。民俗学はこれまで、話者と対峙し基礎資料を収集してきた。これは、口承文芸だけでなく民俗学のすべての領域にあてはまる研究姿勢であり、歴史学の主流をしめる文献史学と研究姿勢を大きく異にする。

両氏のモノとして存在する資料への眼差しは、その向うにある人への眼差しを十分に含んだものであり、優れたフィールドワーカーの博物館展示資料論から改めて私自身の資料に対する認識を一考させられた一日であった。

(埼玉県)

訂正

前号の『伝え47号』に掲載した「第59回研究例会シンポジウム」報告において、コーディネーターを戸塚ひろみ氏とすべきところを誤って記述してしまいました。関係各位にお詫びするとともに、訂正させていただきます。(根岸英之)

## 《小特集①：『遠野物語』100年》

### 『遠野物語』発刊100周年をめぐって 川島 秀一

昨年は『遠野物語』の発刊100周年をめぐって、全国的に多くの催し物や出版物、雑誌の特集号、新聞の文化欄やテレビジョン番組に取り上げられた。

まず遠野市では、『遠野物語』百周年のオープニングイベントが2010年1月17日に開催され、100年前の6月14日という発刊日に近い6月13日の日曜日に「遠野物語100年祭「記念式典」」が行われた。さらに、年末の12月23日にも「これからの100年に向けて―「新たな物語を紡ぐ」―という催し物があり、まさに遠野市の2010年は『遠野物語』の100周年に明け暮れた感がある。

しかし、このような〈祭〉に比べると、遠野市が発行した、昨年の『遠野物語』に関わる出版物となると、いささか貧しく、平成21年度事業として行われた『遠野物語』を学ぶ市民講座「講演記録集」だけであったように思われる。今年になって「遠野物語研究所」から発行された『注釈 遠野物語拾遺(上)』のような地道な研究書が遠野から出版されることを待望された年でもあったはずである。

その「遠野物語研究所」では、昨年は6月に東京会場で、9月は遠野会場で、『遠野物語』100周年をテーマに基調講演や記念講演が行われ、東京会場では、「21世紀と『遠野物語』」というシンポジウムも開催され、多くの参加者で盛り上がった。これらの報告書は近日中に発行される予定である。

他に『遠野物語』100周年に関わらせた出版物としては、石井正己『『遠野物語』を読み解く』(平凡社新書)、三浦佑之・赤坂憲雄『遠野物語へようこそ』(筑摩書房)、藤井隆至『遠野物語』を読もう―柳田国男が意図したもの』(新潟日報事業社)などが目に付いた。

様々な雑誌や定期刊行物も『遠野物語』の特集を組んだ。日本民謡の会編集の『聴く 語る 創る』第19号では『遠野物語』発刊百周年記念号を組み、『季刊 東北学』でも「遠野物語百年」の特集を組んだ。

〈祭〉の後の虚脱感や寂寥感に浸ることなく、今後の100年へ向けて、新しく育った者による『遠野物語』の研究が持続するよう、現在の盛り上がったエネルギーをどちらにも向けるべきか、その各方面の舵取りが注目される時期でもある。(宮城県)

### 101年目の『遠野物語』への旅 米屋 陽一

神奈川県川崎市立日本民家園には、岩手県紫波町船久保字小屋敷に建っていた南部曲家の旧工藤家住宅が移築されている。1759(宝暦9)年に大工の甚六が造ったという墨書も残されている。『日本民家園収蔵品目録11 旧工藤家住宅』(2009年)刊行の折、遠野市青笹町出身の大平悦子さんは工藤家からの聞き取りを行い、工藤家や地域の暮らしを浮き彫りにしている。

そんな縁があつて悦子さんは、旧工藤家の囲炉裏端で遠野の民話、『遠野物語』を遠野言葉で語る新しい語り手に育っていった。その語り口は、遠野の伝承の語りであるようでそうでなく、遠野の語り部養成講座の卒業生的な語りでもなく、遠野言葉で小学校の教員らしく子どもたちをやさしくやわらかく包み込むような人間的なぬくもりを感じさせるような新鮮な語りである。

昨年の5月、新宿エコギャラリーで『遠野物語』発刊100周年記念講演を行った。その際、悦子さんの遠野言葉での語りがあり参会者を魅了した。千葉・船橋での『遠野物語』の講座でも、國學院大學渋谷キャンパスの後期最終授業でも語っていただいた。

『遠野物語』(一八～二一)に登場する毒キノコを食して全滅した「孫左衛門」の盛衰を語る。また、正月休みで大晦日に家にもどる途中の「笛吹峠」の雪穴に落ちて死んだ奉公娘を語る。弟を思い、両親をいたわる娘の気持ちが伝わってくる。語りの原点には人間的なやさしさ・人間愛が横たわっている。

101年目の『遠野物語』の旅(1月5日～7日)を計画した。5日午後、悦子さんの夫君が運転する車で雪降る笛吹峠に向かった。その後、釜石市橋野の向かい笛吹峠で死んだ娘の伝承を聞いた。その娘の墓(供養塔)を見つけた話も聞いた。義経伝説も生きていた。

6日午前、『遠野物語』(一五)に登場する安部家のオクナイサマ、石造のオシラサマを拜ませてもらった。午後、工藤家のある紫波町船久保公民館にて、悦子さんの語りを聞く会が催された。「工藤家で語らせていただいている恩返し」だった。工藤家を取り仕切ってきた103歳の工藤サキさんも家族と会場に姿を見せた。30数人が集った温かな雰囲気語りの場であった。

7日午前、雪にうずもれた「孫左衛門」屋敷跡を訪ねた。毒キノコが生えた井戸跡や亡くなった方たちの墓は、銀世界の下であった。雪が解けたら敷地の中を歩いてみたいと思っている。

大平夫妻は遠野市青笹町に新居を構え、今春から住むという。101年目の『遠野物語』への旅は、新たな語り手「大平悦子の遠野ものがたり」への旅でもあった。(千葉県)

## 《小特集②：新しい「語り」》

### 櫻井美紀という現代の語りの水源

三田村 慶春

櫻井さんの仕事として真っ先に挙げなければならないのは、先ず、「語り手たちの会」の創設を働きかけ、1977年、11人の志ある者で会をスタートさせたことに尽きる。今年で34年目を迎える「語り手たちの会」は今や400人前後の会員を全国に有し、櫻井さんは、会の内外を問わず、子どもへの語りの日常活動は勿論のこと、大人の聴き手にも充分に答え得る「語り」の芸術的高みを追求することで、我が国における「語り」の存在を広く知らしめ、その認識を高めようと努め続けてきた。また米国・ジョーンズボロ市におけるナショナル・ストーリーテリング・フェスティバルに刺激を受けた彼女は、国内での「語りの祭り」開催をも呼びかけた。その「全日本語りの祭り」は1992年、第1回の秩父市から全国各地で2年に1度開かれ続け、昨年10月の山形県・新庄市での第10回では、3日間でのべ1800人の参加者を得るまでに成長している。

目に見える形としての「語り」を組織化しつつ、一方で「語り」の本質を求める研究についても休まず、その歴史的変遷、心理学的側面、児童教育に果たす役割、国際的視野に立つ語りの活動等、次々と自らに課題を課しては、「語り」の表現者、アーティストとしての実験者、実践者たらんと私たちの前に立ち続け、それを裏付けるための研究と、より広い周知を促すための論理化作業を続けてきたことも、他者にはできない仕事であった。膨大な文献資料の中からその歴史を紐解くことを研究の中心とする口承文芸学においては、語り手としての視座から現代における口承の意味を問い続け、それまで日本の民話として考えられてきた「大工と鬼六」、「味噌買ひ橋」が、ヨーロッパの伝承に基があると見抜いたことは「語り手」であったればこそその発見である。また「語り」という行為を既存のテキストに拠って語るのみに留め置かず、語り手自らが原典や類話を参考にしてテキストを書き起こし、「再話する」ことが「語り」の有り得べき姿だとも鋭く説き続けた。このことは「語る者」と「語られる者」の内的対話、心的交流をより図る一方法としての語り、日常の暮らしを描くパーソナル・ストーリーテリングの提唱にもつながっていった。

一方、海外での活動、ストーリーテラーとの交流や我が国への招聘も積極的に行い、歴史的風土や文化の違いこそあれ、世界各国、各地で伝承されてきた「語り」の本質に立てば、民族や国境の隔ては全く意味を持たないことをも学ばせてくれた。私も同行した一昨年のギリシャ・アテネ市で開催された「国際民間伝承学会」での櫻井さんは、我が国の「語り」伝承の歴史

を紹介しつつ、その水脈は遠く古代スキタイ民族が源流になっているのではないかとの報告をし、各国からの参加者の耳目を集めることとなった。

深い思念を湛え、人の存在への大きな愛情を以て、人と人との真の心の交わり、命の育みを櫻井さんは説き続けたように思う。「語り手」がテキストから自由になり、「語り方」のマニュアルから解き放たれ、狭小な窓を開け放って大らかな「語り」を得たときに、「語る者」と「聴く者」との心の交流が成立するのだと。櫻井美紀という現代の語りの水源を求めて、更に辿り歩きたい。合掌。 (語り手たちの会副理事長)

### 第10回全日本語りの祭り in 新庄

大島 廣志

「語りの祭り」というのはNPO法人全日本語りネットワークの主催する行事で、伝承の語り手、方言の語り手(本の昔話を方言で語る)、共通語の語り手(本の昔話を共通語で語る)たちが全国から集り、昔話を含め多様な口承文芸を語り、聞き、楽しむというイベント。1992年以降隔年で開催されている。

第1回は埼玉県秩父市、以後、山形県南陽市、山口県徳山市、沖縄県宜野湾市、群馬県桐生市、鳥取県境港市、静岡県伊豆市、福島県会津若松市、岩手県遠野市と続き、2010年の第10回は10月9日～11日まで山形県新庄市で行われ、延べ3000人が参加した。

1日目の昼は新庄市民文化会館大ホールで、新庄市の伝承の語り手による昔語り、新庄市の子どもたちの昔語り、紙芝居、ライフヒストリーの語り、馬頭琴と語りなどが披露された。夜は宿舎の大広間5ヶ所において、参加者有志50名が日本の昔話や世界の昔話を語った。

2日目は午前10時～午後3時30分まで、新庄の昔語りの部屋、山形・秋田の昔語りの部屋、日本の昔話の部屋、世界の昔話の部屋、紙芝居の部屋、文学の部屋などで参加者108名の語り。夜はぞっとするような怖い話を語るゴーストストーリーの会と、日本の優れた語り手9名と韓国の語り手1名による昔語りの会。

3日目は第10回を記念してのイベント・シンポジウム「語りと地域活動」で、報告者の立石憲利さん(岡山県)からは、伝承の語り手が少なくなった現在、これまで収録した昔話資料(テープ)をどのように次代へ残すかが課題であること。藤巻愛子さん(山梨県)からは、過去の山梨の昔話集を甲州弁に語りなおして今に生かしている活動について。足立茂美さん(鳥取県)からは、語り活動を活発化するには地域の組織化が必要で、情報の発信とその共有が大切であるということ。佐藤栄一さん(山形県)からは、語り手が高齢化している現状から、新たな語り手養成について。などどの地域でも直面している問題が提起され、活発な意見交換があった。

このように“語りの祭り”は、さまざまな語り手が集う日本最大のイベントとなっている。

今回は2012年10月に立石憲利さんを中心に岡山県で開催予定。(東京都)

語りの復活をめざして—国民文化祭・民話の祭典(岡山県総社市)が成功—

立石 憲利

第25回国民文化祭が、2010年10月30日から11月7日まで、岡山県内で開催された。「民話の祭典」は総社市で開かれ、約1400人が来場、成功した。出演は18団体で、語り、紙芝居、オペレッタ、劇などいろいろな形式で表現された。語りは18人で、その中で日本の民話を語ったのは17人であった。

国民文化祭での「民話の祭典」は、すべての開催地で行われてはいない。23回の茨城県ではあったが、24回の静岡県ではなかったし、やり方もさまざまである。

もともと民話は、語りを抜きにして考えることはできない。ところが、この半世紀ほどの間に語りが急速に消え、最近では語り手に出会えることさえ困難になってきた。そこで10年ほど前から採録だけでなく、語りの復活をしようと「立石おじさんの語りの学校」を各地で開催してきた。幸い約300人の修了生のうち約100人がなんらかの形で語りを始めていた。

そこに岡山県での国民文化祭の開催が決まった。どうしても語りをテーマにした「民話の祭典」を開催しようと考え、働きかけ、やっと私の地元・総社市での開催にこぎつけることができた。

そのために、語りのグループを岡山県語りのネットワークに組織した。ネットワークでは年2回の交流会を開き、語りを聞くことで自らの語りを発展させていった。国民文化祭には、全国からすばらしい語り手たちがやってくる、その語りが聞けると話し、祭典成功のためがんばろうと訴えてきた。

結果、語りで参加した人も、要員や聞き手として参加した人も「よかった」と感想を述べ、今年秋、京都府伊根町で開催される「民話の祭典」に、ぜひ参加したいと、岡山県内から、いくつものグループが出演申込みをするという形となった。

家での語りや語り爺さ、語り婆さによる地域での語りは消滅したが、新しい語り手が生まれてきている。幼稚園、保育園、小学校をはじめ公民館、図書館などでの語りが広がっている。場所や聞き手の様相が異なるので、当然のことながら、従前の家などでの語りとは異なってくる。しかし、「子どものころ、お爺さん、お婆さんから聞き覚え、今度は孫に語ってやる」という伝承の基本点は崩さないようにしようと考えている。

そこで「丸暗記せず、自分の言葉で語ろう」がスローガンになり、国民文化祭も、その場として捉え成功

させることができた。今年は、中国地方の語りのネットワークを結成するために努力しようと考えている。

(「民話の祭典」企画委員長、岡山県)

語りの場は川崎市立日本民家園  
日本民話の会・語りの会

小田急線向ヶ丘遊園駅を南へ徒歩12分、雑木林におおわれた丘陵、生田緑地に川崎市立日本民家園がある。古民家(国指定重要文化財を含む23戸)が違和感なく配置されており、山里に迷い込んだかと思われる風景だ。春には鶯のさえずりも聞こえる。ここで「お国ことばで語りっこ」という「語りの会」を重ねて15回になる。

そのきっかけになったのは、2008年9月7日、日本民話の会主催「第2回民話散歩・日本民家園」だった。散歩の途中で千葉県九十九里から移築した作田家で民話を聞いた。4人の語り手が岩手と山形の昔話をつぎつぎに語る。語り手と聞き手が同じ目線で囲炉裏の火を囲む語りの場は気持ちが解かれる。語り手と聞き手が対等の語りの場、「ここには語りの神さまがいる」と誰かがいった。みんな笑顔で作田家を出た。

「私たちが民家園で語れたらいいね」と声上がり、「園に聞いてみよう」ということになった。ちょうど園でも語りの場を広げたかったようで、トントン拍子に民家園での語りの会の開催が決まった。日本民話の会のメンバーによる語りの会「お国ことばで語りっこ」は、2008年10月26日に第1回が行われた。

矢部敦子さんは和歌山県出身の伝承の語り手。やわらかな和歌山弁で祖母から聞いた民話を語る。井上潤人君は大学生。祖父母が生まれ育った多摩町の民話を語りたいと松原村の語り手藤原ツジ子さんを訪ねて聞いた民話を大切に語る。会員歴40年以上の望月新三郎さんは笑い話が得意だが、自らの戦争体験も現代民話として語る。旅先で聞いた話を語る人、移り住んだ土地の民話を掘り起こして語る人、遠く群馬、栃木からも語り手が訪れる。

「お国ことばで語りっこ」は年6回行っている。1月が初語り、8月は納涼の夕べ、2月、4月、6月、10月は各月第4日曜日。午後1時30分～2時15分。15分休憩後、2時30分～3時15分。各45分、2回公演をしている。

今年の初語りは、1月4日に行われた。園内では餅つきや獅子舞もあり、親子連れの入園者が目立つ。古民家佐々木家の囲炉裏の周りでは、「お国ことばで語りっこ」を待つ小学生たちが陣取り、幼児から高齢者まで語りの場は人でいっぱいになった。手遊びで始まり、「十二支の由来」「カチカチ山」「笠地藏」など、1時間余り6人の語り手が語る。熱心に聞き入る子どもたち。目を細めて聞き入る大人たち。生活の匂いが染み

込んだ古民家は最高の語りの場だ。

語る人も聞く人も心が温かくなる日本民家園の語りの場。この語りの場をこれからも大切にしていきたいと思う。  
(東京都)

### 《小特集③：各地から》

東京学芸大学のフォーラム

石井正己

平成22年度は、道徳や環境、広域科学のプロジェクトの経費を使いながら4回のフォーラムを実施し、多くの方々に参加して下さった。

10月には、武田正さんが所沢に転居されたのを機会に、「東北・山形の昔話」を開催した。野村敬子さんの挨拶、武田さんの「昔話とのつきあい50年」の講演、山路愛子さんの「山形県置賜地方の語り」、佐藤晃さんの「山形の民話再刊事業を通して」の講演を実施した。国際化・情報化に対応しつつ豊かな研究と継承が行われていることが確認できた。11月には「昔話にまなぶ環境」を開催した。池内紀さんの「グリム童話の深層」の記念講演、矢部敦子さんの「祖母から聞いた和歌山の民話」、野村敬子さん、荻原真子さん、馬場英子さんの「口承文芸と環境の接点」のシンポジウムを実施した。21世紀最大の課題とも言える環境について、口承文芸から多角的に考える機会となった。

12月には「南洋群島の昔話と教育」を開催した。須藤健一さんの「日本の南洋群島統治の今日」の記念講演、渡部豊子さんの「戦場で語られた昔話」、難波美和子さん、山本節さん、野村敬子さんの「植民地・国際化・口承文芸」のシンポジウムを実施した。一昨年度の台湾、昨年度の朝鮮に続いて植民地時代の昔話を取り上げ、戦争を視野に入れた分析ができた。

1月には「新たなる柳田国男」を開催した。高寄十郎さんと長谷川幸子さんの「柳田国男と福崎町」の紹介、佐藤健二さんの「植民地時代と柳田国男」の記念講演、王蘭さん、金容儀さん、メレック・オータバシさんの「国際化社会と柳田国男」のシンポジウムを実施した。中国、韓国、アメリカの若手研究者が柳田国男と向き合う、初めての国際会議になった。今年8月6日、7日、柳田の生誕地福崎町では、町をあげた50年祭を実施することになっている。

この後、3月6日には「児童文学と昔話」を実施し、岩崎京子さん、あまんきみこさん、小山内富子さんがお話しくださる予定である。

10月分は報告書を発行、12月分は報告書を編集 중이다、11月、1月、3月は出版社の刊行物にする予定である。報告書は関係者に配布する程度しか印刷できなかったもので、申し訳ありませんが、図書館でお読みください。  
(東京都)

### 韓国昔話事情

樋口 淳

昨年10月の末に、突然、崔仁鶴先生から依頼されてソウルの韓国学中央研究院(旧精神文化研究院)で、日本民話データベースと沖繩伝承話データベースの現状について報告することになりました。

1980年代に韓国における民話(口碑文学)の組織的な調査が行われ、その記録が「韓国口碑文学大系」(全82巻)として刊行されたことはよく知られていますが、その後その資料がいかにかに利用されているか、いかなる補足調査が行われたかは知られていませんでした。私自身、比較民俗学会の一員として年2回は韓国の民俗学研究者と研究成果を交換してきたのですが、それが話題にされたことはありませんでした。

ところが、この調査記録は2000年からデータベース化され、そのかなりの部分がインターネットで検索できる状態になっていたのです。そして、さらに2007年からは、前回調査の成果を受け継ぎ、その空白部分を補い、データベースとする作業が開始されていました。日本の場合、調査の多くが個人研究であったのに対し、この調査はいわば「国家プロジェクト」で、予算規模も桁外れです。全国を15余りのブロックに分けて、10年にわたってローラー作戦を展開し、その成果を同時にデジタル化していくというのです。私は、この現実の前に、予算の乏しい日本の現状を説明することになったのですが、「私たちが10年にわたって遂行してきたプロジェクトも満更ではない」という実感を得ました。紙数に限りがありますので、その詳細については次回の学会で報告させていただきます。

韓国のデータベースは、たいへん優れたものですが、一つ大きな問題があります。それは口碑文学の韓国の独自性に拘るあまり「国際比較」という視点がほぼ全面的に欠落していることです。新しいプロジェクトも、アアルネ=トンブソンや関敬吾の仕事、まったく度外視して進行しています。

今回、私が口承文芸(口碑文学)データベース化の日韓協力を呼びかけたことは言うまでもありません。韓国には、言うまでもなく崔仁鶴先生のタイプインデックスがあります。これは、日本の関敬吾の仕事と連動していますし、一度デジタル化された資料の共有は難しくありません。幸いなことに、崔仁鶴先生が、「タイプインデックス」に続いて刊行された『韓国昔話集成』の日本語訳も進行中です。きっと、それほど遠くない将来に日本と韓国の間で、音と文字の資料を通じた比較研究が活性化するのはないかと期待しています。

「韓国口碑文学大系」には民話なども納められていますから、韓国の研究者が「民譚」「昔話(イエンナルイヤギ)」などと呼ぶ民話の数は15107話です。

(東京都)

## 沖縄伝承話資料センターの活動

NPO 法人沖縄伝承話資料センター事務局長

2011年1月16日、当センターは満5歳を向かえました。やっと幼稚園に入園です。NPO法人沖縄伝承話資料センターは、「琉球諸島に古くから伝わる伝承話を調査研究し、記録保存する事業を行い、口承文芸学をはじめ関連する諸学究の資として提供することにより、学術の進展に貢献する他、還元活動をとおして乳幼児、児童・青少年の健全育成に寄与する」ことを目的に設立されました。その母体となったのは、「沖縄民話の会」であり、「沖縄国際大学口承文芸研究会」であり、それらの活動を支える多くの仲間です。

1972年5月15日、沖縄は27年間の米軍統治から解放され「本土復帰」が実現しました。そして、戦後の高度成長から取り残された「沖縄の文化」を記録するため、多くの学術調査団が沖縄入りしました。ちょうどその年、沖縄国際大学に赴任した故・遠藤庄治氏は、「沖縄戦により多くの人を亡くしたにも関わらず、口承文芸の太い伝承を感じる」と、沖縄国際大学の学生を中心に、沖縄ではじめて本格的な「民話調査」を開始しました。遠藤氏の予想どおり、調査の度に貴重な民話が記録されました。そんな調査が33年続けられました。その間に出会った話者は14500人余、記録した話はおよそ74000話です。

こうして記録された民話は、市町村が発行する「民話集」や「沖縄民話の会会報」、出版社などが発行した「沖縄の民話」として紹介されてきました。それらはすべて「民話調査」の中で「話者」から聞いた話ですから、そこには「話者の声」を収録した「調査テープ」が残っています。その本数は約4500本。ただ残念なことに、そのテープのほとんどがアナログテープで、時間とともに劣化し、記録された話が消えていきます。それを防ぐため、当センターでは、日本民話の会の指導と協力により、そのテープの「デジタル化作業」を始めました。今年度末までにおよそ25000話のデジタル化が終了する見込みです。

当センターは、設立の目的に賛同する多くの会員の志で成り立っています。「民話は、遠い昔から人から人へ語り継がれ、そして、語り継がれていく人類共有の財産」です。「民話調査」という形で残された、その「人類共有の財産」を「正しい形」で次世代に継いでゆくために活動しています。ですから、デジタル化作業だけでなく、「語り」の学習も行っています。「むねがたい（語り）」と題し、記録してきた話の中から、それぞれが好きな話を「語り伝える」ための活動を行っています。人はみな、話を聞くことが大好きです。

(沖縄県)

## 日文研の怪異・妖怪研究 この一年とこれから 飯倉 義之

2010年も妖怪の話題で明け暮れた感がある。それには妖怪マンガの第一人者である水木しげる夫妻の半生記をドラマ化し、2010年の流行語大賞にもなった、NHK朝の連続テレビ小説「ゲゲゲの女房」のヒットが大きい。このような妖怪への注目が長期にわたって持続している背景として、怪異・妖怪文化の研究の蓄積が、結果として妖怪好きたちの知的好奇心を刺激する「ネタ」としてプームを下支えしている現状がある。

そうした研究の拠点の一つに、国際日本文化研究センター（日文研）の怪異・妖怪研究がある。日文研の怪異・妖怪研究は、副所長の小松和彦による「共同研究『怪異・妖怪文化の伝統と創造』と『怪異・妖怪データベースプロジェクト』」から成る。

前者は、平成11年から続く怪異・妖怪文化に関する学際的研究の促進をはかる共同研究であり、国内外より民俗学・文化人類学・文学・歴史学・宗教学・人文地理学・美術学等多彩な分野の研究者を集めた研究活動を行っている。近年の共同研究の成果は、せりか書房より小松和彦編著の妖怪文化叢書として『妖怪文化研究の最前線』（2009年10月）、『妖怪文化の伝統と創造—絵巻・草紙からマンガ・ラノベまで—』（2010年10月）の2冊として刊行された。2書ともに、怪異・妖怪が民間伝承の文脈より切り離され、都市文化や創作の中に再構築される過程に目を向けた論考が多く収録されている。

後者は日文研が収集した怪異・妖怪資料をデータベースとして整備し、研究者はもとより一般にも広く利用可能な学術コンテンツとして公開するプロジェクトである。すでに2002年に民俗学研究誌掲載の怪異・妖怪事例を集めた「怪異・妖怪伝承データベース」(<http://www.nichibun.ac.jp/YoukaiDB/>)が公開されているが、2010年には絵巻物・浮世絵等に描かれた妖怪画像をデジタル化し、検索可能とした「怪異・妖怪画像データベース」(<http://www.nichibun.ac.jp/YoukaiGazouMenu/>)が公開された。これは怪異・妖怪の造形研究に大きく寄与するものとなるだろう。

こうした妖怪文化の創造や画像研究の進展に、口承の怪異・妖怪研究はいくぶんの後れをとっている。われわれは「怖い」「不思議だ」という心意をいかに語る/話すのか、課題はまだ残されている。

(京都府)

# 事務局便り

## ○寄贈書籍

佐々木達司・村田良子編『よんであげたい青森のむかし話④雪むすめ』青森県文芸協会 2010年／佐々木達司・村田良子編『よんであげたい青森のむかし話⑤古屋の漏り』青森県文芸協会 2010年／佐々木達司・村田良子編『よんであげたい青森のむかし話⑥狐の嫁取り』青森県文芸協会 2010年／本城屋勝編『増補 わらべうた文献総覧解題』無明舎出版 2006年／下野敏見『南日本の民俗文化誌Ⅰ 鹿児島昔話集』南方新社 2009年／『北海道立アイヌ民族文化研究センター年報 2009(平成21年度)』北海道立アイヌ民族文化研究センター 2010年／『企画展 アイヌ語地名を歩く―山田秀三の地名研究から―』北海道立アイヌ民族文化研究センター 2010年

## 研究例会延期のお知らせ

今般の東北地方太平洋沖地震の影響による混乱のため、第61回研究例会 2011.3.19(土)14時(於 國學院大學)を延期いたしました。開催日時につきましては、後日改めてご連絡いたします。

## 新旧理事会の中止のお知らせ

併せて、同日の第115回運営理事会、及び平成23年度新理事会 2011.3.19(土)11時(於 國學院大學)につきましても中止いたしました。

## ○機関誌データベース化についてのお願い

学会では機関誌のバックナンバーをデータベース化して会員及び一般に公開して利用の便宜をはかりたいと考えております。データベース化は順次古い号から進めて参りますが、現会員で機関誌に執筆された方でデータベース化にどうしても不同意な方は、お申し出いただきたく存じます。通信等での個別の許諾はとりませんので、事務局宛にご連絡をお願いいたします。

なお、お亡くなりになった会員の方々には著作権継承者宛、個別に許諾の連絡を取りました。

なお今後、機関誌34号以降の執筆者については、データベース化に同意して執筆されたものとして許諾はとりません。

2010年10月1日 日本口承文芸学会事務局

## ○日本口承文芸学会事務局

〒150-8440 東京都渋谷区東4-10-28 國學院大學文学部 花部英雄研究室

TEL:03-5466-0224(直通) / FAX:03-5466-0368(日本文学資料室)

E-MAIL: koshobungei@mail.goo.ne.jp

## 日本口承文芸学会を広くご紹介下さい。

日本口承文芸学会への入会を希望なさる場合は、事務局に連絡をいただくか、学会HP (<http://ko-sho.org/>) から用紙をとりこんでダウンロードしてお申し込みください。

入会金 1000円、年会費 4000円です。

郵便振替口座 00180-4-44864をご利用下さい。